

ピラミッドと王権

内田 杉彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

The Pyramid and Kingship

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプトの王は神々と人間の仲介役を果たす存在であり、それゆえに「神」の性格を持つとされた。この伝統的な王権理念は先王朝時代から徐々に発展を遂げ、古王国時代に確立するが、その当時造営されたピラミッドには、北天の星や太陽の信仰と結びつき強化された王権理念が示されている。

キーワード：古代エジプト，王権，ピラミッド

Key words : Ancient Egypt, Kingship, Pyramid

1. はじめに

古代エジプト社会は王を頂点とする「ピラミッド形」の階層社会であり、王の持っていた強大な権力を支えていたのは、王を神の化身としあるいは神性を持つ存在とする信仰であった。とはいえ王は全能の「神」として意のままに国家を支配する専制君主だったわけではなく、当時の社会の要請から生じた王権理念に従って「神」の役割を果たしていたと言える。^{1) 2)}

古代エジプト人が生活していたナイルの谷は規則的なナイルの氾濫に代表される自然の恵みにあふれた世界であった。このため彼らは、自分たちの国が神（創造神）の作りだした特別な「世界」であり、ともに作られた神聖な「宇宙秩序」（マアト）がそれを支配しているという意識を持つようになる。このマアトには、自然界の「秩序」だけではなく人間界の「社会秩序」も含まれており、それゆえ社会を支配する王には自然のバランスを保つ役割も期待されることになった。自然界は神々の支配下にあると信じられていたから、「自然のバランスを保つ」とは人間界と神々の世界の調和を保つことに他ならず、それゆえ神殿の造営や祭儀の執行など神々のための奉仕が王の義務とされた。社会

秩序を維持するための行政が官僚によって行われたように、祭儀の多くは神官によって代行されたが、それらはいずれも「建て前」としては王の役割だったのである。^{1) 2)}

人間界と神々の間に立って「仲介役」を果たすことを要求された王は、そのために神としての性格（神格）を持たざるをえず、また、創造神の作った世界とマアトを受け継ぐ以上、創造神と同じ性格や能力を持つとされた。古代エジプトの王は、マアト（宇宙秩序）を維持し世界（エジプト）を守る役割を担っており、そのために「神」とみなされていたと言えるのである。^{1) 2)}

このような王権理念（「神王理念」）の基本的な枠組みは、古代エジプト最初の繁栄期である古王国時代に確立し、その頃に造営されたピラミッドは、それを象

表1. 古代エジプト年表

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
ナカダⅠ文化期（前4000～3500年）
ナカダⅡ文化期（前3500～3200年）
ナカダⅢ文化期（前3200～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第1～2王朝：前3000～2686年）
第1王朝（3000～2890年）
第2王朝（2890～2686年）
古王国時代（第3～6王朝：前2686～2181年）
第3王朝（2686～2613年）
第4王朝（2613～2494年）
第5王朝（2494～2345年）
第6王朝（2345～2181年）
第一中間期（前2181～2025年）
中王国時代（前2025～1795年）
第二中間期（前1795～1550年）
新王国時代（前1550～1069年）
第三中間期（前1069～715年）
末期王朝時代（前715～332年）
ギリシア・ローマ支配時代（紀元前332～後395年）

徴するものとされる。古代エジプトの王権理念はどのような経緯を経て確立に至ったのだろうか。

2. 王権理念の萌芽：先王朝時代

古代エジプトの特徴となった階層社会は先王朝時代の上エジプトで発展を遂げ、それが統一国家成立へとつながったとみられるが、王権理念の基礎となる概念もまた、この時代の流れのなかで形成された。³⁾ 上エジプトでは早くも先王朝時代前期において共同体内部に貧富の差が存在したことが、当時の墓坑の規模や副葬品に見られる差異からうかがえるが、ナカダ I 文化期には共同体の発展とともに大形墓が出現し、その副葬品として高度の製作技法を用いた石製品が作られるようになる。これは専門職人とそのパトロンとなった権力者の存在を示しており、地位と貧富の差の拡大、社会構造の複雑化がみてとれる。この文化の中心的な集落だったナカダで発見された前3600年頃の土器片には古代エジプトの代表的な王冠の1つである「赤冠」の装飾が見られるが、これは、そのような階層社会の発展とともに、後の王権理念の基礎をなすイデオロギーもまた形成されつつあったことを示している。³⁾ この土器片は「赤冠」に関する最古の資料であり、この王冠が本来は上エジプトに起源を持つ「王権」の象徴、おそらくはナカダの支配者の王冠だったことが推察できる。



図1. エジプト略図

大規模な集落や大墓地が出現するナカダ II 文化期には社会構造はさらに複雑化し、共同体の支配者たちは周辺地域、特にメソポタミアとの交易によっていっそ

う大きな権威と経済力を得た。当時の上エジプトでは、おそらく交易ルートや天然資源の点で経済的に有利だった共同体が他の共同体を併合し、あるいは共同体同士が併合するという形で地域間の統合が進んだと考えられる。その結果、各地に小さな「国」が出現し、上エジプト南部では、ナカダ、ヒエラコンポリス、そしてアビュドス付近の町ティニスを中心とする3つの国が有力となったが、先王朝末のナカダ III 文化期にはティニスの王家がこれらの国々を統合し、上エジプト全土を支配する「上エジプト王国」を成立させたとみられる。^{2) 3)}

エジプトの国土統一は、この「王国」が北部の下エジプトを征服することにより達成されるが、統一後のエジプトの王権理念の原型は、この「上エジプト王国」の段階で形成されたと思われる。アビュドスに造営された当時の王墓から、後のエジプト王権の象徴となる王笏（ヘカ笏）が発見されていることは、^{3) 4)} その証拠のひとつと言えるが、とりわけ重要な意味を持つのは「上エジプト王国」の王名として採用された「ホルス名」^{1) 2) 3)} である。この「ホルス名」は、長方形の



図2. 「ホルス名」(左)と、カルトゥーシュに囲まれた「ネスウト・ビティ名」(右)：中王国時代の浮彫より

枠（セレク）の中に記され、セレクの上には、ヒエラコンポリスの神であり王家の守護神でもあるホルスを表わすハヤブサが描かれた。セレクは巨大な建造物、おそらくは王宮を表わしたものとみられ、その内側に王名が記されていることは、王が王宮に居を定めて国土を統治していることを示す。ハヤブサの姿でセレクの上にとまるホルスも、エジプト美術の表現様式に従えばやはり王宮の内部にいることになり、しかも枠の名称セレクは「知らしめる」という意味を持つ。⁶⁾ すなわち「ホルス名」は、ホルスの力が王を通して明らかにされたこと、言い換えれば王がホルス神の化身であることを意味すると解釈できる。^{1) 2) 3) 6)} これは王を

「神」とする「神王理念」の基本形を示しており、古代エジプト王権理念の原点と言える。事実、国土統一以後の王朝時代にも、この「ホルス名」は主要な王名のひとつとして引き継がれていくのである。

先王朝時代に建てられたヒエラコンポリスのホルス神殿は、長方形の周壁で囲まれた境内に墳丘が築かれるという構造を持つ。⁸⁾ 古代エジプトの宗教思想によると、世界の創造は、混沌を象徴する水の拡がりから小高い丘が姿を現わし、そこに創造神が出現することによって始められたとされており、ホルス神殿の墳丘もそのような丘（「原初の丘」）を表わしたものだと思われる。⁹⁾ つまり王をその化身とするホルス神は世界とマアトを作った創造神とみなされていたのであり、創造神と同じ性格を持つ王が世界とマアトを守るというエジプトの王権理念の根幹をなす信仰がすでに存在していた可能性があると言えるだろう。

また、この神殿の遺跡から発見された上エジプト王家のいくつかの奉納品には、当時の王の姿が浮彫で表現されているが、そこには王朝時代のエジプト王と共通する特徴が示されている。³⁾ 『「さそり」王の棍棒頭』に表わされた「さそり」王はティニス王家の王冠とみられる「白冠」をかぶり、王の力を象徴する雄牛の尾のついた腰布をつけているが、これらはいずれも国土統一後の王によって受け継がれ、「白冠」は王権の上エジプト支配を象徴する王冠となる。ナルメル王の下エジプト征服戦争を記念したとされる「ナルメル王のパレット」でも、王は「さそり」王と同じ腰布をつけているが、「白冠」だけでなく、「赤冠」をかぶった姿でも表現されている。この「赤冠」がナカダの「王権」を示しているのか、それともすでに下エジプトの王権を象徴するようになってきているのかは明らかではないが、少なくともこれらの浮彫からは、先王朝時代を通じて形成されてきた王権の概念が「上エジプト王国」において集約され、王権を視覚的に表現する様式がすでに確立されつつあったことがうかがえる。

3. 王権確立の試み：初期王朝時代

「上エジプト王国」による国土統一は、さらなる王権の強化を促すこととなった。上エジプトの神であるホルスの「神王理念」だけでは、全土を支配する王権の理念としては十分でなく、統一王国にふさわしい王権を確立する必要が生じるのである。国土統一に続く初期王朝（第1～2王朝）時代は、この王権確立のための様々な試みがなされた時期である。ナルメルの後継者であり第1王朝初代の王とみられるアハ王は、上下エジプトの境界付近という、行政の拠点を置くには格好の位置にメンフィスの都を建設したとみられるが、これはそのような試みの第一歩と言える。国家行政を担う官僚機構の整備も進められ、メンフィスを見下ろすサッカラの台地には、中央政府の官僚となった

貴族の墓地が作られた。王権確立のための様々な政策も積極的に実行され、対外的には周辺異民族に対する軍事遠征がしばしば行われたが、これは、王家による交易ルートと天然資源の独占をめざすとともに、秩序を守る王の権威と実力を示すためのものと思われる。国内においては各地で神殿の造営や神像の製作が盛んに行われており、神々と人間界の仲介者としての権威を示そうとする王権の意図がうかがえる。

これらの国家的事業を支える経済基盤の確立も第1王朝の王権にとって重要な課題となったことは疑いない。王あるいは高官による国内視察がたびたび行われ、年ごとにナイル氾濫水位の計測が行われたほか、第4代デン王の治世には一種の「国勢調査」が開始されているが、これらは国土の経済力・生産力を把握しようとする試みとみることができ、王家の財源確保のための定期的な徴税が行われていたことを暗示している。

このような実政策的な政策を背景として王権理念の強化もまた計られた。それはまず、「ホルス名」に続く新たな王名として「ネプティ（二女主）名」と「ネスウト・ビティ名」が追加採用されたことによって示される。「ネプティ（二女主）名」は王が、上下エジプトをそれぞれ守護する二柱の女神、ネクベトとウァジェトの化身であり、それゆえ上下エジプトをともに支配する神聖な権利を持つことを示すものとされる。^{1) 2) 3)} 「ネスウト・ビティ名」は、王が上下エジプトの王権をあわせ持つことを示すとされ、「ネプティ名」と同じく王権による全土の支配を正当化するための王名として「上下エジプト王名」と訳されるのが一般的であった。^{1) 2) 6)} しかし最近になって、この王名は本来、王があわせ持つ「神（の化身）」と「人間」という2つの性格を示すものだったとする説が出されている。^{3) 5) 7)} この解釈に従えば「ネスウト・ビティ名」は、「神」とされながら現実には「人間」であるという王の立場を説明しようとした最初の試みであり、後の古王国時代に見られるような、王を「神の息子」などとする解釈（後述）の原点とみなせるであろう。第1王朝時代にはさらに、先王朝以来の王冠である「白冠」と「赤冠」を統合して上下エジプトの統一王権を象徴した「二重冠」が作られたほか、王の権力を維持・更新し、その正当性を示すための宗教儀礼である「セド祭」など、王権を支える様々な儀礼も整えられた。³⁾

こうした数々の試みによって当時の王権がすでに強大なものとなりつつあったことは、アビュドスに造営された当時の王墓が、墓坑を中心とした王墓本体と長方形の「葬祭周壁」からなる比較的大規模な「葬祭複合体」^{3) 8)}を構成していたことからうかがえる。日乾煉瓦で作られたこの「周壁」には表面に凹凸の装飾を持つものが見られ、王宮の「模型」か、王権儀礼の場を再現した建造物と思われるが、そこには王が死後もその地位を保ち、来世に君臨する支配者となるとする考

え方が示されていると言える。

続く第2王朝時代の前半にも、異民族との戦争や神殿造営など王権確立の努力は続けられている。王墓地は「上エジプト王国」以来のアビュドスからサッカラへと移されるが、これは王家が全土の支配者としての意識を強く持つようになったことをうかがわせる。ところが第2王朝後半には王権理念の混乱が生じたように思われる。第6代国王が「ホルス名」(セケムイブ)に代わって「セト名」(ペルイブセン)を採用、王墓地を再びアビュドスとするのである。³⁾ セレクの上には、ホルス神のハヤブサではなく、ナカダの神セトを象徴する動物が表わされたが、これは王家の守護神がホルスからセトへと代えられ、王がセト神の化身とされるようになったことを示している。その背景にはかつて「上エジプト王国」に併合されたナカダの勢力による反動があったのかもしれない。

しかし第7代国王は、やはりアビュドスに王墓を造営するものの、再び「ホルス名」(カーセケム)を採用して旧来の王権理念に復帰、セト神を擁する勢力との内戦の末に国土を再統一する。王はおそらく対立勢力の和解による平和と秩序の回復を記念して、セレクの上にホルスとセトが並ぶ王名「ホルス・セト名」(カーセケムウイ:「2つの力は現れたり」)を採用するが、以後の歴代国王は再び「ホルス名」に復帰しており、王をホルスの化身とする王権理念が確立したと言える。^{1) 2) 3)} このカーセケムウイ王が造営した「葬祭周

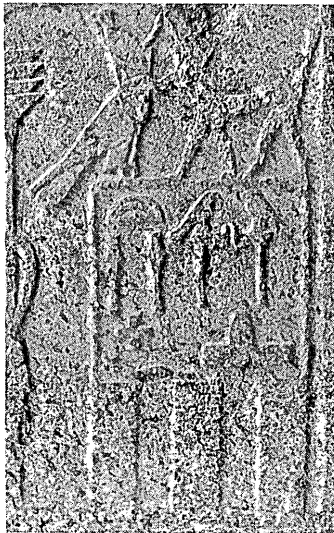


図3. 石柱に刻まれた「ホルス・セト名」

壁」^{3) 8) 9)} は、東西54m、南北113mの敷地を二重の壁が囲むという最大規模の「周壁」であり、その内側にはホルス神殿に見られるような墳丘が築かれているが、これは王の強大な権力と、王を創造神ホルス神の化身とみなす王権理念を明確に示したものとみることができるだろう。

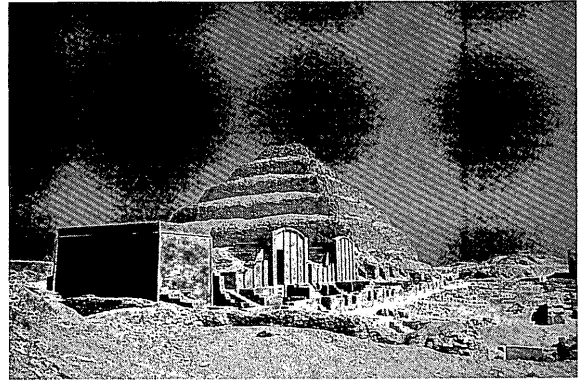


図4. ジョセル王の「階段ピラミッド」

4. 王権理念の確立：古王国時代

カーセケムウイ王の後継者であり第3王朝の初代とされるジョセル王の時代は、強固な王権が確立した古王国(第3～6王朝)時代の幕開けとされるが、この王が王墓地をサッカラに戻し、そこに「階段ピラミッド」を造営したことは、その象徴とみなされる。²⁾ 高さ約60m、6段の階段状をなすこのピラミッドは、いくつもの付属建造物とともに、南北545m、東西277mの周壁に囲まれた「階段ピラミッド複合体」を構成しており、そのすべてが石材で作られていた。⁸⁾ それは長方形の地上構造(マスタバ)を特徴とする貴族の墓とは明確に異なるうえに、それよりもはるかに大規模な建造物であり、主に日乾煉瓦で作られていた初期王朝以前の王墓を、規模や建築技術の点ではるかにしのいでいる。

その意味でこの「複合体」は、王権が格段に強化されたことを示す記念建造物と言えるが、それは初期王朝時代に生みだされた王権理念の流れをくむものでもあり、先代カーセケムウイ王の「葬祭周壁」から発展したものともみることができる。^{8) 10)} たとえばこの「複合体」の周壁は、カーセケムウイのそれよりもはるかに大規模とはいえ、長方形で表面に凹凸を持つという点で共通しており、「階段ピラミッド」も、数度にわたる改造を経てそのような形になったもので、当初は、おそらく墳丘を模倣した正方形の構造物だったことが判明しているのである。^{8) 11)} すなわち「階段ピラミッド複合体」の基本構造は、周壁に囲まれた墳丘というカーセケムウイの「葬祭周壁」の構造と一致しており、王を創造神ホルスの化身とみなす信仰がここにも反映されていると言える。周壁の内部にはこの正方形の「墳丘」の建設と同時に、王の彫像を葬った「南の墓」のほか、生前の王の権力を更新しその正当性を示す「セト祭」用の建築を模倣した建造物が作られ、王墓と「南の墓」の地下にはこの「セト祭」を行なう王を表わす浮彫が施された。王権を維持するための宗教儀礼が「模型」や図像とされて王墓に「添えられた」という事実は、王は現世だけでなく来世にも君臨するという先

王朝の王権理念が受け継がれていることを示すと言えるだろう。

しかしこの「複合体」の「墳丘」は、結局は「階段ピラミッド」となり、その北側には亡き国王を供養するための葬祭神殿が建設され、ピラミッド内部への入口通路もやはり北側に設けられた。これらは、古くから不滅の存在とされていた北天の星の信仰が王権理念のなかに取り込まれていたことを示す。第5王朝末の葬祭文書「ピラミッド・テキスト」の呪文によれば故王は天に上って神々の一員となり永生を得るとされ、その昇天の手段のひとつとして「階段」が挙げられているが、「階段ピラミッド」はまさにその「階段」であり、王の靈魂が葬祭神殿の指し示す北の空へのぼって北天の星となるための手段だったと思われるのである。^{2) 10)} 「階段ピラミッド複合体」には、王の地位が来世でも保たれるだけでなく、王が天上の神にもなるという信仰が反映されており、そこには神の化身として一般の人間とは区別された王の特別な立場と、初期王朝のそれよりもさらに強化された王権理念が示されていると言えるだろう。

しかしジョセルの「複合体」の建設には5000~7000人の人員があれば十分で、エジプト全土からの徴用はおそらく必要なかったことが指摘されており、当時の王権が全土を完全に掌握していたかどうかについては疑問視されている。^{2) 10) 12)} 事実、第3王朝最後の王フニと、第4王朝初代スネフェル王は上エジプト各地に小形の「階段ピラミッド」を建設しているが、これらは王権に対する信仰を全土に徹底させるための「記念物」であったとみることができるのである。^{3) 8) 11)}

これに対し、続く第4王朝時代は、エジプト全土を支配する王権が真に確立した時代と言えるであろう。スネフェル王が「階段ピラミッド」を上回る規模のピラミッドを3基も造営していることは、王が労働力を全国規模で動員できるだけの権力を手中にしたことをうかがわせるが、その「ピラミッド複合体」は形式においても大きな変化を示している。この王が最初に造営したメイドゥムのピラミッドは、当初は「階段ピラミッド」として作られたが、後に四角錐の形をした高さ92mの「方錐形ピラミッド」へと改造され、「複合体」も第3王朝のそれとはまったく異なるものとなった。^{8) 11)} すなわちかつての「南の墓」のかわりに「付属ピラミッド」(衛星ピラミッド)が作られただけでなく、葬祭神殿がピラミッドの東に作られ、そこからナイルの谷に向かって参道が伸ばされたのである。この「複合体」は結局は未完成に終わり、スネフェルはさらに高さ約105mの2基のピラミッドをダハシュールに造営する。はじめに作られた「屈折ピラミッド」は「方錐形ピラミッド」として着工されたものの、建造方法に問題があったため傾斜角度が変更され「屈折した」形となったが、「ピラミッド複合体」はメイドゥムのそ

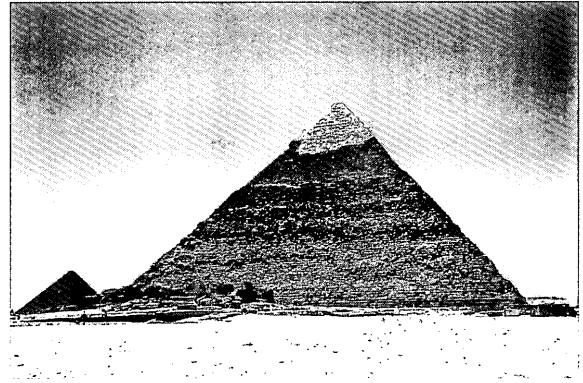


図5. 第4王朝の「方錐形ピラミッド」

れよりも整っており、参道は壁で囲まれ、その先端には新たな葬祭建造物(「下神殿」)が追加された。⁸⁾ しかしこのピラミッドも王墓とされることはなく、次の「北のピラミッド」がようやく完全な「方錐形ピラミッド」として完成し、スネフェルはそこに埋葬されたとみられる。⁸⁾

スネフェルの後継者である第2代クフ、第4代カフラー、第5代メンカウラーの3人の王がギザに造営したピラミッド群は、この「方錐形ピラミッド」を代表するものとされる。特にクフの「第一ピラミッド」は、完成時の高さが146.6mと最大規模である点や、その高度な建築技術などが注目されているが、このピラミッドと、カフラーの「第二ピラミッド」は、「方錐形ピラミッド複合体」の基本構造が確立しているという点でも重要な意味を持つ。^{8) 11)} まずクフのピラミッドでは、「葬祭神殿」と参道の規模が拡張され「下神殿」がナイルの谷沿いの「河岸神殿」となるのにくわえ、王妃のためのピラミッドも作られるが、これは以後の「ピラミッド複合体」でも基本的には踏襲された。カフラーの「第二ピラミッド」では、葬祭神殿の規模はさらに大きくなり、広間や倉庫、王像を安置する壁龕などの設備が整えられる。このような葬祭神殿の構造も、後の「ピラミッド複合体」の基本的な特徴となるのである。

「方錐形ピラミッド」の四角錐という形状は、おそらく太陽光線を表わしているとみられる。^{2) 8)} 故王の昇天に関する「ピラミッド・テキスト」の呪文(前述)には、昇天の手段として「階段」とともに「太陽光線」も挙げられており、王は地上に降り注ぐ陽光をつたって天に上るとされているが、「方錐形ピラミッド」はその光線を形にしたものとみることができるのである。太陽は古くから神(ラー神)として崇められており、王の靈魂は、北天ではなくむしろ太陽神のもとに赴くとする信仰がここに示されていると言える。かつてピラミッドの北側にあった葬祭神殿が東に移り、「複合体」がピラミッド本体から東へ伸びる構造になっていることも、故王が昇天する先が日の出の方角である東の空とされていたことをうかがわせる。

太陽神ラーは舟(「太陽舟」)を用いて天空と地下の

冥界を永遠に旅していると信じられており、「ピラミッド・テキスト」には、王の靈魂がこの旅に加わり、あるいは太陽神と合体するための呪文が含まれている。「方錐形ピラミッド複合体」は、故王がそのような形で永遠の生命を得るという信仰を表しており、そこには王権と太陽信仰の密接な関係が表現されていると言えるだろう。そのような両者の関係は、まず、第3王朝時代末期から王名（「ネスウト・ピティ名」と王子の頃からの名前である「誕生名」）を囲む枠として使われる楕円形のカルトウーシュで示される。このカルトウーシュは、本来は王名の「守護」の意味を持っていたとみられるが、やがて太陽神がたどる道筋を意味するようになり、王の支配権が太陽のめぐる全世界に及ぶことを象徴するようになるのである。^{2) 6) 7)}

第4王朝第3代ジェデフラー王は太陽神の聖地ヘリオポリスの対岸のアブ・ロアシュにピラミッドを造営し、この王以後の「ネスウト・ピティ名」には一般に太陽神の名前（「ラー」）が含まれるようになるが、これは王家とこの神の絆が強まったことを暗示している。このジェデフラー以降の第4王朝の王がときおり用いられるようになる称号「ラーの息子」（サァ・ラー）^{1) 2) 6)}は、この両者の関係を説明したものと言えるだろう。ホルス神と同じく太陽神も古くから創造神とみなされていたが、その信仰は時とともに有力となり、ついに太陽神は最も代表的な創造神とされるようになる。創造神ホルスを権威のよりどころとした王家は、第4王朝時代にこの太陽神信仰を取り込むことで王権理念の強化を計ったと考えられるのである。しかし王はこの太陽神の「化身」とはされず、その「息子」として「父」の創造した世界を守り、死ぬと昇天して「父」のもとに行くと思われられるようになった。これはひとつには（おそらく「ネスウト・ピティ名」のように）「神」でもあり「人間」でもある王の性格を説明しようとしたものであろう。王は「神」ではなく、むしろ「神の血筋」を継いだ存在とされたのである。ただし旧来の王権理念は捨てられたわけではなく、王が死後も地位を保ち、あるいは北天に昇るという概念も「方錐形ピラミッド複合体」の特徴のなかに残された。¹⁰⁾ 付属建造物の壁面には「セド祭」の場面が浮彫で表現され、ピラミッド内部への入口も依然として北側に設けられていたのである。

「方錐形ピラミッド複合体」には、太陽信仰によって強化された王権理念が表現されていたのであり、その建設事業は、「神王」あるいは「ラーの息子」としてマートを保証する国王への信仰によって支えられていた。^{2) 10)} ピラミッド造営に参加することは、国民、とりわけ農民にとって義務であったが、それは現世のマートの維持につながるばかりでなく、王の再生・復活に協力して現世と同じくマートに支配された来世を実現するという意味も持っていたと思われる。ナイルの谷

での恵まれた生活を死後も続けることは古代エジプト人の最大の願望であったが、ピラミッド造営はそれをかなえる手段と信じられていたのである。

第5王朝時代にはいると、王を太陽神の息子とする考え方が有力となる。それは、「ピラミッド複合体」に匹敵する規模を持つ太陽神殿の造営や、「ラーの息子」が王の公式称号として「誕生名」に伴うようになることからうかがえる。国王は太陽神の子として人間界に生まれ、父なる神のために奉仕し、その「代理」として統治するという理念が強調されるようになるのである。後代の伝承によれば、第5王朝の最初の3人の王は太陽神ラーとその神官の妻との間に生まれたとされているが、これもひとつにはそのような考え方の反映とみることができよう。これは必ずしも王権理念の後退を示すものではなく、むしろ、「人間」でありながら「神」の役割を果たさなければならない王の立場について、より合理的・効果的に規定しようとした試みであったように思われる。²⁾



図6. 第5王朝の「方錐形ピラミッド」

第5王朝の方錐形ピラミッドはいずれも高さ50m前後と小さいうえに建築技術も劣り、現在では原形をとどめないまでに崩壊しているため、当時の王権が衰えていた証拠とみられがちである。しかしその「ピラミッド複合体」は第4王朝のものよりも発達しており、^{8) 10)} 葬祭神殿や河岸神殿を中心とした供養・葬祭のための施設は拡張され、カフラー王の頃に確立した葬祭神殿の基本構造も、この時期にはさらに複雑化して数多くの倉庫や部屋が追加されている。また参道や神殿の壁面はすべて美しい浮彫で飾られるようになり、そこには「セド祭」の場面にくわえ、王と神々の交流、外敵を倒す王の姿など、王の立場や役割が一定の様式で表現されているのである。第5王朝の「ピラミッド複合体」は、ピラミッド本体よりも王に対する信仰の場となる葬祭施設に重点を置き、王権理念をより明確に表現しようとしたものと言えるだろう。

第5王朝最後の王ウナスのピラミッドにはじめて見られる葬祭文書「ピラミッド・テキスト」は、王の靈魂が昇天するための呪文とともに、亡き王が冥界の支

配者オシリス神として復活するための呪文も含んでい
る。「オシリス神話」によれば、エジプトの王であった
オシリスは死後に冥界の王として復活し、オシリスの
現世における王権は息子のホルスによって受け継がれ
たとされているが、この神話は古くからの王権の神ホ
ルスと再生・復活の神であったオシリスの信仰を結び
つけ、王権が不滅であることを示そうとしたものと思
われる。^{1) 2) 3)} すなわち王は死後にオシリスとして来世
を支配し、次の王がホルスとして現世を統治するとさ
れたのである。ここには、亡き王は来世に君臨する
という古くからの考え方だけでなく、王は即位とともに
神聖な王権を引き継ぎ、それによって神（ホルス）の
化身とみなされるという考え方²⁾ が示されていると言
える。これは、「ラーの息子」とともに、「神」と「人
間」の性格をあわせ持つ王の立場、すなわち旧来の
「神王理念」ではうまく説明できなかった王権の問題点
を巧みに説明し、王権理念を補強したものともみること
ができるだろう。

5. おわりに

先王朝時代以来発展を続けた王権理念は、第5王朝
時代に集大成され、その「枠組み」が確立したと言え
る。以後のエジプト史の流れのなかで王権理念は様々
に変質していくが、神聖な王権の継承者として地上に
おける神の「代理」を演じる者こそ王であるとするこ
の「枠組み」は、マアトと世界を守る王の機能を支え
るものとして受け継がれていく。それは王の置かれた
立場を巧みに説明したものであり、おそらくそれゆ
えに、王を中心とする古代エジプト文明を数千年にわ
たって維持する原動力となったのである。

文 献

1) 屋形禎亮：古代エジプト，前川和也ほか，岩波講座：

- 世界歴史 2：オリエント世界-7世紀，31-60，岩波
書店，東京，1998
- 2) 屋形禎亮：エジプト文明の成立，大貫良夫ほか，人類
の起源と古代オリエント，373-417，中央公論社，東
京，1998
- 3) Wilkinson, Toby A. H. : Early Dynastic Egypt.
Routledge, London and New York, 1999
- 4) Dreyer, G. : A Hundred Years at Abydos. Egyptian
Archaeology, **3** : 10-12, 1993
- 5) Ray, J.D. : The Pharaohs and Their Court, Malek, J.
(ed.), Cradles of Civilization : Egypt, 69-77, University
of Oklahoma Press, Norman, 1993
- 6) Allen, James P. : The King's Names. Allen, James
P. , Middle Egyptian : An Introduction to the
Language and Culture of Hieroglyphs, 64-66,
Cambridge University Press, 2000
- 7) ショー, イアン, ニコルソン, ポール : 大英博物館：
古代エジプト百科事典, 87-89, 129-130, 原書房,
東京, 1997
- 8) レーナー, マーク (内田杉彦訳) : 図説ピラミッド大
百科. 東洋書林, 東京, 2000
- 9) O'Connor, D. : New Funerary Enclosures
(Talbezirke) of the Early Dynastic Period at Abydos.
Journal of the American Research Center in Egypt,
26 : 51-86, 1989
- 10) O'Connor, D.: The Earliest Royal Boat Graves.
Egyptian Archaeology, **6** : 3-7, 1995
- 11) 畑守泰子：ピラミッドと古王国の王権，前川和也ほか，
岩波講座：世界歴史 2：オリエント世界-7世紀，
211-232，岩波書店，東京，1998
- 12) Stadelmann, R. : Builders of the Pyramids. Sasson,
M.(ed.), Civilizations of the Ancient Near East,
vol.II,719-734, Charles Scribner's Sons, New York,
1995
- 13) 内田杉彦：古代エジプトの「死後の世界」，明倫歯誌，
5 (1) : 58-63, 2002